探偵雑誌

妖奇

1947年～1952年

復刻版 全21巻＋別冊1

戦後の欲望は妖しげな貌をしている。エロは犯罪や暴力と近接する衝動であると同時に抵抗の倫理であった。混沌の時代を駆けぬけた稀少なミステリ雑誌、ついに復刻。

1947(昭和22)年7月に創刊された「妖奇」は戦前の佳作を発掘して再掲載するとともに、新人や覆面作家をも積極的に登用する。ビジュアル面にも力を注ぎ、気鋭の画家たちによる挿画は多くの読者を蠱惑魅了した。

エロとミステリの親密な関係を軸に、敗戦後のうちひしがれた人々を欲情させた本誌は、身体をめぐる時代のドラマツルギーを解明する貴重な素材となるだろう。

◉解　題　石川巧／浜田雄介
◉推　薦　芦辺拓／山前譲
◉第1回配本　本体54、000円＋税
◉刊　行　2016年11月

限定70部

三人社

探偵雑誌 妖奇

◈復刻版概要◈

◉原　誌　オール・ロマンス社
創刊号(1947年7月)～7巻4号(1952年4月)
※(後継誌『トリック』を含めて全72冊を全21巻に合本して復刻)
◉解　題　石川　巧〈立教大学文学部教授〉
浜田雄介〈成蹊大学文学部教授〉
◉体　裁　B5判・上製・総約7、000頁
◉推　薦　芦辺　拓〈推理作家〉
山前　譲〈推理小説研究家〉
◉揃価格　本体378、000円＋税
◉原誌提供　ミステリー文学資料館／石川巧

●配本概要　※各配本ごとの分売は可能です。

	配本	復刻版巻数	内容
第1回	全3巻 本体54,000円 ISBN 978-4-908147-70-8 2016年11月	第1巻	第1巻第1号～第1巻第6号
		第2巻	第2巻第1号～第2巻第6号
		第3巻	第2巻第7号～第2巻第13号
第2回	全3巻 本体54,000円 ISBN 978-4-908147-74-6 2017年6月	第4巻	第3巻第1号～第3巻第5号
		第5巻	第3巻第6号～第3巻第9号
		第6巻	第3巻第10号～第3巻第13号
第3回	全4巻＋別冊 本体72,000円 ISBN 978-4-908147-78-4 2017年12月	第7巻	第4巻第1号～第4巻第3号
		第8巻	第4巻第4号～第4巻第6号
		第9巻	第4巻第7号～第4巻第9号
		第10巻	第4巻第10号～第4巻第12号
		別冊	解題・総目次・執筆者索引
第4回	全4巻 本体72,000円 ISBN 978-4-908147-84-5 2018年5月	第11巻	第5巻第1号～第5巻第3号
		第12巻	第5巻第4号～第5巻第6号
		第13巻	第5巻第7号～第5巻第9号
		第14巻	第5巻第10号～第5巻第12号
第5回	全4巻 本体72,000円 ISBN 978-4-908147-89-0 2018年12月	第15巻	第6巻第1号～第6巻第2号
		第16巻	第6巻第3号～第6巻第5号
		第17巻	第6巻第6号～第6巻第7号
		第18巻	第6巻第8号～第6巻第10号
第6回	全3巻 本体54,000円 ISBN 978-4-908147-94-4 2019年5月	第19巻	第6巻第11号～第6巻第12号
		第20巻	第7巻第1号～第7巻第2号
		第21巻	第7巻第3号～第7巻第4号

●主要執筆者

井上友一郎　徳田秋声
宇桂三郎　野村胡堂
海野十三　土師清二
江戸川乱歩　長谷川伸
大下宇陀児　林房雄
岡田三郎　華村タマ子
岡本綺堂　浜田紅児
尾久木弾歩　久生十蘭
小栗虫太郎　北条誠
香住春作　本田喜久夫
角田喜久雄　丸木砂土
木々高太郎　水谷準
北林透馬　三角寛
邦枝完二　南川清
黒沼健　村上元三
甲賀三郎　森田草平
小酒井不木　山本禾太郎
サトウハチロー　夢野久作
寒川光太郎　横溝正史
柴田錬三郎　渡辺啓助
島本春雄
城昌幸
高木彬光
東郷青児
徳川夢声

三人社
〒606-8316
京都市左京区吉田二本松町４　白亜荘
電話 075-762-0368
FAX 075-762-0369

●表示はすべて税別

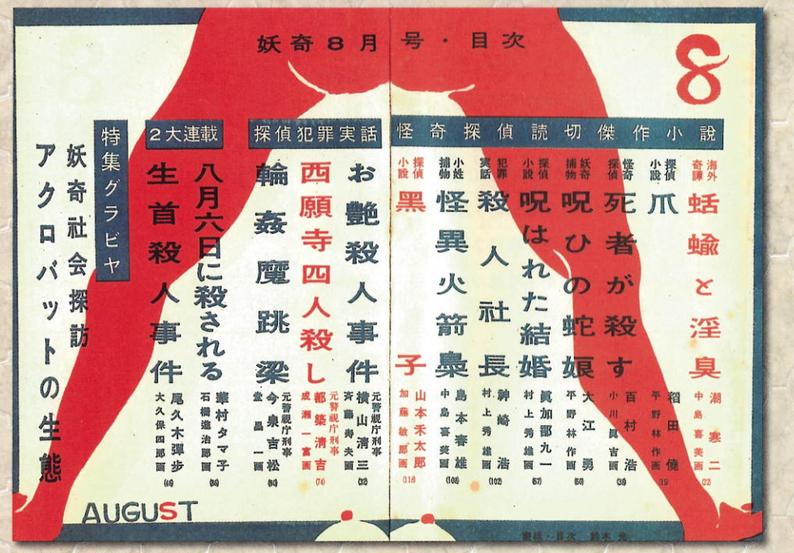
※図書館様・書店様へ
小社は少部数出版のため取次口座はございません。ご注文は直接上記までお申し込みください。

2016/9

内容見本

▲第5巻第5号　挿画

▲創刊号　目次



▲第5巻第8号　目次

▲創刊号表紙

▲改題第一号表紙

「妖奇」の果——または三流探偵小説の恐怖

芦辺　拓〈推理作家〉

もう二十年前になるでしょうか。鮎川哲也先生と怪奇幻想アンソロジーの編纂をごいっしょした私は、何とか知られざる怪作・珍作を発掘しようと、某コレクター氏の書庫に入らせていただきました。そこのカニ歩きしてやっと通れるような棚また棚を抜けた先に、大判の雑誌が詰まった一角があったのです。

「妖奇」！　そのタイトル、その表紙、今どきの雑誌では見かけない口絵に本文挿絵、そしてギッシリと詰めこまれた小説の数々——「生首殺人事件」？「双頭髑髏の恐怖」に「人喰い蝦蟇」？　尾久木弾歩って誰だよ！

一読何もかもがいかがわしく、愛おしく感じられました。これぞ探していた宝の庫だ、ここに今こそ脚光を浴びせるべき作品があると確信した私は、その場に座りこみ、それらの稀書にして奇書に読み耽り始めました。

そのときの私は知らなかったのです——ある種の雑誌、およびそこに掲載された探偵小説は、ときに人の意識さえ喪失させてしまうということを！

気がつくと、私は「妖奇」のバックナンバーに埋もれながら、夕刻近い日差しを浴びていました。B級映画とかB級アイドル、B級グルメなんて言いますし、マイナー系エロ漫画誌に拠った若い作家たちが三流劇画を呼号したこともありましたが、それらを突き抜けた質的な意味での真のB級、まごうことなき三流が、どれほど凄まじいものであるかを私はそのとき思い知らされたのでした。

詳細については、読者ご自身で確かめていただきたいのですが、これから「妖奇」を読まんとする徒には、君たちはあまりに妖奇者であり過ぎてはならない、と申し上げたいのです。この小文こそよき戒めである。妖奇の果がいかばかり恐ろしいものであるか！　と。

隅々まで目を通したくなる妖しい探偵雑誌

山前　譲〈推理小説研究家〉

昭和二十年の終戦で探偵小説界は大きな変化を見せた。その動向を知るには、翌年に創刊された「宝石」がもっとも重要である。有望な新人がそこから数多く登場したからだ。

では、その次に目を通すべきは、カストリ雑誌時代の探偵小説専門誌か、出版界が落ち着いた昭和二十年代半ばに創刊された「探偵実話」や「探偵倶楽部」か……こうして探偵雑誌を漁っていくと目に入ってくるのが「妖奇」である。昭和二十二年の創刊から五年余りの命だったが、なんといっても月刊ペースを維持したのがすごい。用紙不足で、「宝石」ですら最初の数年間は合併号が当たり前だった時代である。

それにはひとつからくりがあって、創刊当初は再録が主だったのだ。物故者を含めて、探偵小説界の錚々たる作家が並んでいる目次はじつに華やかで、よく売れたというのも肯ける。やがて新作が増えていくが、これも別の意味で華やかである。〝宝石作家〟というくくりがあるが、〝妖奇作家〟はとんでもないとしか言いようのない個性的な作品を、次々と世に送りだしたからだ。

現在伝えられている経歴によれば、発行人の本多喜久夫は一九二〇年の生まれである。したがって、二十代後半にして、「妖奇」ほかの出版活動を精力的に行っていたことになる。これもまたじつにミステリアスで、〝妖奇作家〟と同様、その実像にはそそられる。

名は体を表すというが、まさに妖しく奇怪なこの探偵雑誌の隅々に目を通すと、色々な発見があるに違いない。もっとも、それ以上にさまざまな疑問が沸き上がってきて、悩ましくなるかもしれないけれど——。

✣三人社ミステリシリーズ〈既刊〉　残部僅少

黒猫　復刻版

◉監修　浜田雄介〈成蹊大学文学部教授〉
◉解説　石川巧〈立教大学文学部教授〉
◉体裁　B6判・並製・総約900頁
◉推薦　山前譲〈推理小説研究家〉
◉冊数　全11冊＋別冊1
◉別冊　解説・総目次・執筆者索引
◉定価　本体45、000円＋税〈分売不可〉

猟奇　復刻版

◉監修　浜田雄介〈成蹊大学文学部教授〉
◉解説　小松史生子〈金城学院大学文学部教授〉
◉体裁　A5判・上製・総約2、430頁
◉推薦　芦辺拓〈推理作家〉
　　一柳廣孝〈横浜国立大学教育人間科学部教授〉
◉揃価格　本体120、000円＋税